

トカラ列島口之島と中之島におけるアチックフィルム上映会

A Screening of Attic Films at Kuchinoshima and Nakanoshima in the Tokara Islands

高城 玲
TAKAGI Ryo

1. 「アチックフィルム・写真」共同研究 と現地上映会開催の背景

神奈川大学日本常民文化研究所には、主に昭和初期に渋沢敬三を中心とするアチックミュージアム同人らによって撮影された30缶余りの動画フィルムと約9000点弱にのぼる写真が所蔵されている。これら数多くの「アチックフィルム・写真」は、大正末から昭和初期にかけての日本各地の景観とそこに住まう人々の生活、民俗、芸能や当時使用されていたモノを具体的な映像として記録にとどめている。また、中には当時日本の統治下におかれていた台湾や朝鮮、満州などの映像も含まれており、これまでも多様な学問分野から貴重な資料としてその価値を認められてきた。⁽¹⁾

今回、2009年度より国際常民文化研究機構が新たに発足したことを受け、このフィルムと写真を主な研究対象とする「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」と題する共同研究を推進している。そこでは、主に2つの課題を念頭に置いている。第1は、国際常民文化研究機構全体のデータベース整備事業と連携し、映像資料の文化資源化の可能性を探るという課題であり、第2は研究目的として主に(1)モノという物質文化の問題、(2)モノと人との関係性の問題、(3)異文化（自文化）表象の問題等を検討するという課題である。

第2の課題である「モノ・身体・表象」

に関連する研究に着手するにあたって、まずは前段階として映像資料の整理とその文化資源化のための作業が欠かせない。これまで、アチックフィルム・写真の価値が認められながらも、膨大な数にのぼる戦前の資料であることもあって、いまだ資料整理の途上であり、特に動画フィルムに関してはいくつかの例外を除いて研究対象として正面から取りあげられることは多くなかった。⁽²⁾

そのため今回の共同研究では、まずは映像資料の整理という作業に重点を置いている。この作業は、機構全体のデータベース整備事業と連携を取りながら進めており、特に、写真に関して、粗目録から仮目録、本目録へと段階を踏んだ目録化を行っている。写真の仮目録作成まではほぼ終えており、現在は撮影場所や日時などを他の文献資料を参照しながら特定していく本目録化の整理が随時進行中である。⁽³⁾

こうした機構全体における映像資料の整理状況の中で、本共同研究では地域を限定した上で、映像資料を核にした多岐にわたる情報を統合的に整理するという文化資源化の可能性を検討している。ここで言う多岐にわたる情報とは、(1)動画フィルムと写真の映像資料を出発点として、(2)映像目録、(3)現在残されている収集品、(4)当時の調査団が残した文献資料、(5)上映会で現地の住民から新たに提供してもらった情報などを

含み、それらを統合化して整理しようというのである。これらの情報はより「厚い記述」のデータとして、今後の研究を支える柱となることが期待される。

上記(3)から(5)に関しては簡単な説明が必要であろう。まず、(3)現在残されている収集品とは、現在主に国立民族学博物館に収蔵されている当時のアチック調査団による収集品(モノ)である。映像に記録されているモノと現在残されているモノの対応関係を調査し、情報整理のデータに組み込んでいきたいと考えている。

また、(4)当時の調査団が残した文献資料とは、当時の調査団員らがその後活字にした文献資料や調査当時にまとめたと思われる『十島雜綴』などである。特に『十島雜綴』は、調査団に参加していた宮本馨太郎に関連する宮本記念財団が所蔵していたもので、⁽⁴⁾ 調査に際して当時まとめた手書きガリ版刷りの基礎資料集である。「薩南十島」の地形や風土、気候から役場職員の数やその給与に関する行政データまで、当時考えられる限りの基礎データを網羅した資料集である。こうした文献資料も統合的なデータ整理に組み込んで行きたい。

最後の(5)上映会で現地の住民から新たに提供してもらった情報とは、戦前に撮影された映像の上映会を現地で開催し、集まってくれた住民から新たに提供してもらう関連情報である。

今回の共同研究では、こうした多岐にわたる情報の統合化を目指しているが、時間的にも映像に記録されている全ての地域を網羅する余裕がない。そこで、まずは映像資料の中のトカラ列島口之島と中之島に地域を限定して作業を進め、⁽⁵⁾ その後に向けての試行的なパイロットケースにしたいと考えている。

以下では、上記の研究課題に沿って開催

された口之島と中之島でのアチックフィルム・写真の上映会に関して簡潔に紹介したい。

2. アチックフィルム上映会の概要

これまで、共同研究としてトカラ列島でのアチックフィルム上映会を2回開催した。第1回目は2010年3月22～25日における口之島での上映会・調査で、第2回目は2011年3月18～21日における中之島での上映会・調査である。

現地で上映した動画フィルムと写真は、渋沢敬三をはじめとするアチック調査団が1934(昭和9)年5月14日に鹿児島を出発してから5月20日に鹿児島に戻るまでの7日間にわたる「薩南十島調査」で撮影したものである。当時は前年に「としま丸」という船が竣成就航し、その船を調査団が借り上げて各島を訪問している。船中泊を重ねながら、短期間に各島をめぐり、短い場合には島の滞在時間が数時間にも満たないという駆け足の調査ではあったが、民俗学・民族学、宗教学、地理学、農学、生物学、人類学、岩石学などの各専門家を含む総勢20名以上の大規模な合同調査であった。⁽⁶⁾ 島での短時間の調査の中で、各専門家がそれぞれの関心に基づいて調査を行い、当時としては画期的な動画フィルムや写真として当時の状況を記録にとどめている。

こうした戦前の映像を住民の方々に見てもらう機会として、鹿児島県十島村教育委員会の協力を得て、2010年3月23日午後には口之島小学校体育館での上映会を開催した。小学校の生徒や教員以外にも村の住民の方々が数多く駆けつけ、島民の半数近い50名ほどが映像を見て当時やその後の情報を寄せてくれた(写真1参照)。子供や高齢の島民も多くおり、フィルムと写真の上映会は2時間半以上に及んだにもかかわら



写真1:口之島小学校でのフィルム上映会(2010年3月23日)
撮影:羽毛田智幸



写真2:中之島の役場支所でのフィルム上映会(2011年3月19日)
撮影:因塚哉

ず、多くの方々が初めて目にする約76年前の映像に多大な感心を寄せていた。中には、幼少期の本人が写真に写っているという事例も見つかり、本人にとってもこれが唯一の幼少期の写真になるとのことだった。

また、口之島では、小学校体育館での上映会の他、高齢のため会場に来ることができなかった島内で最古老の一人の方に、自宅で重点的な聞き取り調査を行ったほか、鹿児島市内の十島村役場でも、村長ほかの方々にも映像を見てもらい、聞き取り調査を行うことが出来た。

同様に翌年の2011年3月19日午後には、十島村教育委員会の協力を得て、十島村役場中之島支所で映像の上映会を行った(写真2参照)。こちらの上映会も盛況で島民約70名弱が集まり、貴重な情報を寄せて頂いた。特に、現在、中之島で保存継承活動が行われている島の民俗芸能(踊りや狂言)に関する当時の映像には、多くの島民の方々が見たこともないようなかつての姿がフィルムに記録されており、改めて非常に貴重な映像であることが再確認されることにもなった。

ここでは、上記2回の上映会と聞き取り調査に共通する方法に関して、以下4点ほどで概要をまとめておきたい。

まず第1は、上映会の開催に先立って、現地へ協力を依頼し開催場所を確保する必

要があるという点である。今回は、十島村の教育委員会の協力を得て、口之島小学校の体育館と中之島の役場支所という公的な施設を利用させてもらうことができた。また、村内の広報拡声マイクを利用して事前に上映会の開催を案内して頂いたため、多くの住民に集まってもらうことが可能となった。

第2は、上映会ではそれぞれ『アチック写真Vol. 2』(口之島)、『アチック写真Vol. 4』(中之島)という写真集を冊子にして作成し(写真3参照)、事前に住民の方々に届けておいてもらうことができたという点である。事前に配付した冊子には、それぞれの写真に仮の題名やアルバム台紙に書き込まれた当時のメモもあわせて記載したほか、各写真に関する質問も掲載した(写真4参照)。この冊子を上映会でも使用し、情報を寄せてもらう便に供することができた。

第3は、フィルム(動画)の上映方法に関する点である。今回は、それぞれ体育館と役場支所という比較的大きな施設でプロジェクターを利用してスクリーンに映すという方法をとった。但し、フィルムには音声が含まれないため、こちらで適宜解説を加え、途中で動画を静止させながら関連する質問を投げかけていった。

第4は上映会の様子を如何に記録するか

に関する点である。今回の上映会の様子は、新たにビデオカメラで撮影し、住民の方々がどのような情報を寄せ、どのように映像に接するかを映像として記録するという方法をとった。但し、2回の上映会とも数十名以上の多くの方々が広い会場に集まっているため、全ての会話や状況を映像や音声で拾うことは難しい。会場では、着席している隣や前後で当時の映像に関する語り合いが至るところで始まる様子が見受けられたが、設置したカメラの位置などによって死角が出た部分もあった。1回目の口之島でのこの反省を受け、中之島の上映会では、



写真3:「アチック写真Vol.2」(口之島)と「アチック写真Vol.4」(中之島)

カメラの数や位置を改善し、会場の各所にICレコーダを配置してより多くの会話を拾うよう心がけた。

3. 口之島上映会における島民の反応

ここでは、上映会において島民が具体的にどのような反応を示したのかに関して、口之島での上映会の事例を3つ紹介しておきたい。

事例1

まずは、口之島小学校体育館で行われた上映会の事例である。1934年当時の調査団が口之島の砂浜に上陸する場面の動画を目にした現在の島民らの反応である。

島民女性1「へえー、すごい。いやー、なんで？ 昔の方がよかー。ねえ。へえー。何で砂浜が……。あの浜の近くにあつて、波が寄せてこんかったの？ 小屋？ あれ。民家でしょ」

島民女性2「民家やなかって、小屋やて」

島民女性1「え？」

島民男性1「漁に行く衆の小屋やて」

島民女性2「ほにゃ」

島民女性1「へえー。・・・昔の生活はいいなー」

このやりとりで、戦前の島の様子を初めて目にした女性1は、「へえー」という感嘆詞を何度か繰り返して素直な驚きを示している。その上で、現在の港と比較して、「昔の方がよかー」との感想を表明している。また、フィルムに写っている砂浜の「漁に行く衆の小屋」に関して、女性1は、その存在さえも知らなかった。ここでは、フィルムを介して、島民の間でかつての島の状況に関する語り合いや伝え合いが行われ、記憶が継承されていく過程が見て取れると言えるだろう。



目録番号:ア-10-28 写真撮影者:三宅宗悦 撮影時期:昭和9年



口之島の小学校にて女性による笠踊

質問 左端の建物は何ですか。

質問 どのような機会にどのような人が踊るものですか。

質問 笠踊りにまつわる伝承は何かありますか。

当時のメモ

口之島 笠踊 (新作)

写真4:『アチック写真Vol.2』(口之島)の一部

事例2

次は、同じ口之島小学校の上映会で、フィルムの民俗芸能の場面に関して島民男性2が疑問をさしはさむところである。

島民男性2「この、いま止めてもらってですよ。これ、足の履いているやつを分らないですか？ 地下足袋なのか？」

映像を止めて、確認。

島民女性3「地下足袋。あー、あー、地下足袋」

島民女性4「地下足袋」

島民男性2「今は裸足なんです。素足なんです。当時は何か履いてるもんだから」

島民女性5「このじいちゃんが言うには、こん時は偉い衆が来たから、撮影の為に地下足袋履いたんじゃないかって。今、履いてないもんね」
このやりとりでは、民俗芸能を演じる当

時の男性が履いている履き物が話題になっている。当時のフィルムでは何か履いているのが確認されるが、今は裸足で踊りを踊るというのである。男性2はフィルムを止めて確認したいほど、注意深く関心をもってこの映像を見ている様子がうかがえる。また、フィルムという目に見えるかつての映像を、上映会で島民が同時に共有することによって、民俗芸能の履き物という具体的なモノをめぐる語り合いと意見の交換がこの場で喚起されたと言えるだろう。

事例3

最後の事例は、高齢のため上映会場に来ることができなかった島内で最古のひとりに、自宅で重点的な聞き取り調査を行った際のものである。

古老「昭和9年で言うことは、・・・私が14歳ぐらいの時、今90で」

調査者1「覚えていますか？ この人たちが来たというのを」

古老「これは、人、こんな来ないでしょ。ここに写真ありますけどな、分からない」

(中略)

調査者1「これ、『としま』」

古老「『としま』。ほう、これは・・・これが、『第一としま』か、150トン、うちん『としま』は、『としま』と入りよると。入ってん？」

調査者1「ここに書いてある」

古老「ああ、ああ、本当。『としま』入ってる」

調査者1「『としま』の『ま』が見えますよね」

古老「うん、うん、・・・ほいで、そいでさっきのほら、お偉方が来た、そんな時にお盆のね、学校の庭だつて観に行つて。・・・ほら記憶がな、思い出してきた」

(中略)

古老「そんな時に青年の先輩の方々ね、お盆の踊りそのままをして、良かった。今でも記憶に残ってる。そいで、そんな時お偉方が来たときに、『これは一、いいぞ』って褒められたん(笑)、うん」

この場は、1934(昭和9)年にアチック調査団が島を訪れた時14歳だった島の古老に当時の映像を見せながら話を聞いている場面である。当初は、「写真があるけど、分からない」としていた古老が、話しながら映像を具体的に見ていくうちに当時の記憶を呼び戻していく過程が見て取れる。当時就航したばかりの『としま』丸の映像を具体的に目にしてからは、150トンという細かな数字までもが思い出されるほど、当時の記憶が口をついて出てくるのである。ここでは、当初「分からない」としていたものが、映像を介して「今でも記憶に残っ

ている」という状況にまで変化している点に注目したい。写真や動きを伴った動画フィルムは、そうした埋もれている記憶を掘り起こす潜在的力を有していると考えられるのである。

4. 上映会の意義と今後への課題

最後に、こうした映像上映会を開催し調査を進めることの意義と今後への課題として主に以下の2点を指摘しておきたい。

第1は、上映会で島民の方々から得られた映像に関連する新しい情報は、先に述べたアチックフィルム・写真を核とする多岐にわたる情報の統合化にとって、非常に重要な意義を有するという点である。特に、フィルムに関しては、撮影後、長い時間が経過し、本格的な整理や研究が進められてきた訳ではないため、何が映像に記録されているのかという基本的なことも十分明確でない事例も多い。それを、島民の方々から寄せられる新たな情報で補いながらデータの整理に役立てていきたいと考えている。

他方でこの点に関連する課題として、時間的な問題を挙げることができるだろう。1934年の撮影当時から2010年で76年を経過しており、90歳になる村で最古老の一人もようやく記憶を掘り起こしてくれたように、時間的な問題は大きな壁である。しかしながら、今、こうした上映会と調査を進めて行かない限り、映像に関する記憶が途切れてしまう危険性が高いことも確かである。この点は、上映会と関連調査を急ぐ必要があるという今後の課題につながるだろう。

第2の意義は、こうした上映会と地域社会とのインターフェースにあると考えられる。上記の村民の反応からも分かるように、かつての島の状況を初めて目にして驚きの

声を挙げる人、民俗芸能のかつての姿に注目する人、映像を介して約76年前の記憶を蘇らせた人など、このアチックフィルム・写真の映像資料が、島民の多大な関心呼び、記憶を掘り起こす媒介となるなど潜在的な力を有していることが確認されたと言えるだろう。特に注目したいのは、具体的な映像を媒介とする上映会を開催することによって、現在の島民の間で様々な語り合いが活発に行われるという点である。こうした上映会の場所は、島民の間でかつての記憶を呼び起こし、語り合い、伝え合う場所ともなっているのである。つまり、上映会の場は、映像を核にしなが、当時を共同/協働で想起し、伝え合う場所としても重要性を有していると言えるだろう。

上映会と地域社会との接点に関しては、上映会が地域社会に対して果たす役割・意義と同時に、今後に向けての課題も提起される。つまり、こうしたアチックフィルム・写真という文化資源を如何に現地社会に還元していくことができるのかという課題である。特に、中之島で民俗芸能の保存活動を行っている島民は、「フィルムに記録されている狂言を現在演じることが出来る人は誰もいないため、この映像を保存活動に役立てたい」との意向を示している。こうした地域社会への還元に関しては、フィルムの法的な権利なども含めて検討した上で、積極的に役立てて頂ける方途を探る必要があるだろう。

本共同研究では、アチックフィルム・写真が、研究上や社会との接点において有しているこうした文化資源としての潜在力を最大限活かして行きたいと考えている。

註

- (1) これまで、神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」第3班において、主に写真にみる景観などに関する研究が進められてきた。
- (2) フィルムを対象とした研究に、原田健一、岡田一男 [1998]「渋沢敬三のフィルムについて」『映像民俗学』4号がある。
- (3) 国際常民文化研究機構の「所蔵資料の情報共有化」の一環として、主に写真資料の目録化が進められている。詳細は以下を参照。
<http://atticblog.jominken.kanagawa-u.ac.jp/>
(2011年5月23日現在)。
- (4) 宮本記念財団の宮本瑞夫氏に資料を閲覧させて頂いた。
- (5) トカラ列島口之島と中之島を最初に取りあげる理由は、フィルムと写真がコンパクトにまとまっており、上映会の開催が比較的容易だったことや、当時の調査が多分野の研究者らを組織した比較的大規模な合同調査となっていたことなどによる。
- (6) 渋沢敬三 [1953]「20年前の薩南十島巡り」『朝日新聞』1953年5月20日、渋沢敬三 [1961]『犬歩当棒録』角川書店、中村正則編 [1956]『柏葉拾遺』柏葉会などによる。